今月の寄贈品コーナー

講のつどい

１２月１日（金）～１月３０日（火）

１９９５年１２月１日(金)～'96/1月30日(火)

●日

●瑞雲(ずいうん)

●鉾

●剣

●矢

●鶏
「鶏が鳴くまで話してろ」とお日待ちをするのが庚申講。そのため、鶏がついたとも、申の翌日が酉だからともいう。

●三猿
左から言わざる・見ざる・聞かざる。庚申様は猿の神様といわれるくらい有名。庚申塔と猿の結びつきの由来は、庚申の申(さる)からとも、後に庚申信仰と習合した山王信仰の使わしめが猿であったからともいう。三猿の語呂合わせは、庚申の晩に、人体に潜んでいる三尸(さんし)の虫が睡眠中に天帝に悪事を告げ口にいって人の寿命を縮めるという道教の教えにからめたものか。

●毒蛇
髪か、とぐろを巻いた蛇か不明。髪は逆立つ。

●月

●瑞雲

●天眼
青面金剛は三眼。心を見抜く力がある眼という。

●宝輪

●ドクロの首飾り

●青面金剛(しょうめんこんごう)
手は６本（４本の場合もある）。三尸(さんし)を退治する神とされ、憤怒の形相で、悪魔降伏の威力を示す。江戸中期以降庚申塔の主尊となる。

●弓

●ショケラ
半裸の女人像

●鶏

●邪鬼二匹

＊この他、通常オヒョウゴ（掛軸）には二童子、四夜叉(やしゃ)、また青面金剛の後頭に火焔(かえん)をともなった輪光が描かれる。

▲土屋人増自治会館　文久２年（１８６２）庚申塔　＜イラスト：大澤龍二郎氏＞

平塚の庚申講と地神講

★講の集い

市内には稲荷講・念仏講・大山講・庚申講(こうしんこう)・地神講(じじんこう)など講と呼ばれる信仰集団がいくつかあります。このうち、平成6年１２月をもって活動を終えた北金目中久保庚申講中と四之宮通り町庚申・地神講中より寄贈していただいた講のオヒョウゴ（掛軸）、供物用の膳椀、帳簿類などを中心に、庚申講と地神講の関連資料を展示しました。

どちらの講も近所の１０軒くらいで組み、庚申講は年６回、暦の庚申(かのえさる)の日に合わせ、地神講は年２回、これも暦の社日（しゃにち：春分・秋分に最も近い戊の日のこと）にそれぞれ回り番のヤドの家に戸主が集まって行います。オヒョウゴを飾って灯明と線香、供物を捧げ、御馳走を食べ、夜更けまで四方山話をしてすごす集いです。

庚申講を例にとると、市内には江戸時代前期から大正時代にかけて１７０基程の庚申塔が造立されており、そのほとんどが庚申講中によるものです。少なくみても市内の庚申講には３００年の歴史があるといえます。ここでは、庚申・地神講が古くから地域社会に欠かせぬ集いであった理由を、娯楽・経済・信仰の３つの側面から考えてみたいと思います。それは、同時に、かつてはほぼ市内全域で行われていた庚申・地神講の失われていく原因を明らかにすることにもなりましょう。

★娯楽的側面

娯楽は＜食＞＜話＞＜遊＞の３つに大別できます。まず＜食＞からいえば、御馳走を食べられることが講の大きな魅力でした。戦前はバクメシといって白米と大麦（丸麦→ひきわり→押麦に変化）の混炊が常食でした。麦飯が白米に比べ味覚的に劣るかどうかは、白米が当たり前のわれわれには分かりませんが、少なくともかつての農家では、白米だけの飯は祭などハレの日にしか口に出来ぬありがたい食物でした。講の集いでは、各自白米５合なりを持ち寄り、菜代も納め、白い飯とヤドがこしらえたカワリモノを思う存分食べることができました。ところが、今は「お庚申行くより、うちの飯のほうがうまい」という御時勢です。

普段こむづかしい話や、逆に馬鹿話などしていると「＜話＞は庚申の晩」といわれ、庚申の晩にはそれこそ「鶏が鳴くまで」話しこんだものです。気の合った者同士の私的な親睦の行事で、農作業などの情報交換を行う場でありました。

＜遊＞では、話しに飽きると花札など博打に興じる講中もありました。

★経済的側面

庚申・地神講では頼母子(たのもし)や無尽(むじん)といって、掛金をなし、積み立てた講金を籤(くじ)で講員に平等に配当するシステムがとられていました。例えば、１５軒程で構成していた四之宮通り町の地神講中では鍬無尽といって、６月から８月にかけて各講員から何升かずつ集めた麦を換金し、年に２名分当たり籤を出し、当たった者に鍬を買う代金が配当されました。

庚申講は傘講といって、唐傘(からかさ)が出ました。このような無尽は経済成長とともに次第に行われなくなり、積立金で旅行したり、末期には１年間の積立金を人数で割って現金で戻すように変化するなど、無尽の意義も失われました。

★信仰的側面

地神さんは農業の神で、社日には鍬を扱ってはいけないといわれます。先に触れたように、四之宮の地神講中では、集めた麦を換金し、秋の社日に鍬代金の当たり籤を出します。折しも１０月には麦の畑うないが行われ、地神講で買った鍬で耕作した麦で再び鍬を買うというように地神を中心とした循環をみてとることができます。地神講で買った鍬を使うと良く当たる（豊作になる）といわれるように、地神を経由することによって鍬に付加価値が生じるなど地神には作神の要素が濃厚に感じられます。

庚申と唐傘の関係は不明ですが、庚申様は手が６本あって働き者なので、信仰していると財をなすといわれます。

★消えゆく講

以上見てきたことをもとに消滅の原因を整理すると、①経済が豊かになった。②テレビに代表される娯楽の増加、多様化。③若い世代の理解が得られなくなった。④勤め人の増加による生活リズム、価値観の相違。⑤科学知識の普及による信仰心の低下などが挙げられます。勤め人にとっては、地域社会より職場やサークルなどの人間関係が重要になっており、生活圏の拡大とともに庚申・地神講の存在意義も失われていくようです。

体験学習
《紙すき》

■11月12日の日曜日に実施した体験学習「紙すき」には16名の方々が参加されました。

講師は埼玉県小川町在住で紙すきの伝統技術保持者の金子庫市氏にお願いしました。

（写真は、参加された方が講師の指導で紙をすいている様子です）